

# アフリカに関する 良質なルポルタージュ

佐藤 千鶴子

〔南アフリカ政治社会研究〕

現代のアフリカに興味を持つ読者のみなさんに、三冊の良質なルポルタージュを紹介したい。いずれも英文書だが、ジャーナリストが執筆した最初の二冊は文体が平易で読みやすく、物語に引き込まれてあつという間に時間が立つ。

最後の一冊は重いテーマを扱っているのにもかかわらず、ブログ日記を読んでいるように読みすすめられる。三冊とも決して明るい話ではないが、現代のアフリカに生きる人びとの苦難のみならず、矛盾に満ちた現実に対処する強さを垣間みせる内容となっている。

## ●南アフリカに暮らすソマリ

難民

ジョニー・ステインバーグの最新作『喜望（グッド・ホープ）の男』（紹介文献①）には、ケープタウンに暮らすソマリ難民、アサ

ドの半生が描かれている。しばしば「崩壊国家」として紹介されるソマリアは実に二〇年以上もの間、内戦状態にあるが、アサドは、内戦が始まった一九九一年一月、八歳で首都モガディシユを逃れて難民となった。その後、ケニアの難民キャンプやエチオピア東部の親戚宅などを経て南アフリカにやってきた。モガディシユでは実母の殺害を目撃し、父親は行方不明になったため、叔父や遠縁の叔母にあたる人物とともに安住の地を求めていくのだが、ソマリ社会における氏族のネットワークを通じた助け合いがこの過程で果たす役割の大きさには驚かされる。

著者がアサドに初めて会った二〇一〇年時点で、アサドは弱冠二八歳。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）による第三国定住の可能性に希望を託しつつ、トタ

ン小屋が立ち並ぶケープタウン市内の一時避難キャンプに家族（妻と子）と住み、タバコ屋と日雇いの仕事で生計を立てていた。著者はおよそ一年間にわたりアサドのもとに通って話を聞くとともに、エチオピア東部やケニアの有名なソマリ街イスリなどアサドが暮らした場所を訪ね、足跡を辿る。二〇〇八年に南アフリカ各地で起こったアフリカ系外国人を対象とする暴力事件を含め、アサドやその友人、親族が南アフリカで経験したゼノフォビア（外国人排斥）についても語られる。アサドの記憶力もさることながら、それに基づきアサドの半生を再構成する著者の筆致も巧みである。

著者のステインバーグは時流に乗ったテーマを選ぶのが得意な人だ。これまで八冊の本を出版しているが、そのテーマは、民主化と

ともに増加した白人農場主の殺害、ケープタウンのギャング、エイズなど、南アフリカ国内で社会的関心がとりわけ高いものばかりである。彼は生まれも育ちも南アフリカであり、現在も同国の新聞にコラムなどを執筆しているが、二〇一一年にはイギリスのオクスフォード大学教授に就任した。アカデミックな論文もきっちり書く人であり、今後は研究者として活躍するのだろうが、本書が最後のルポにはならないことを祈りたい。

## ●コンゴを旅する現代の「探検家」

次に紹介する『血の川…アフリカの傷ついた心への旅路』（紹介文献②）は、アフリカ大陸中央部に位置するコンゴ民主共和国が舞台となっている。コンゴもまた一九九〇年代半ば以降に二度の内戦を経験し、同国東部では今でも不安定な状況が続く。本書は、イギリス紙のアフリカ支局員を務める著者が、二〇〇四年に主にオートバイと船を利用して、タンガニカ湖ほとりの町カレミーから首都キンシャサの先にあるボマまで三一五〇キロ余りにわたり、東から西へと陸路でコンゴを横断した旅

の記録である。なお、旅の出発点となるカレミーにはコンゴ第二の都市、カタンガ州ルブンバシから空路入りし、一部、ヘリコプターを利用せざるを得なかった区間もある。

旅の目的は、ヘンリー・スタンレーの旅路を辿りつつ、紛争後のコンゴ国内、とりわけ都市から遠い「奥地」がどのような状況にあるのかを自分の目でみることであった。スタンレーは、ナイル川の源流を探しにでかけたまま行方不明になっていたリビングストン博士を発見したことで一躍有名になった一九世紀のジャーナリスト兼探検家である。本書ではスタンレーの旅のルートや装備、当時のベルギー領コンゴ植民地についても詳細に述べられているが、現代アフリカに興味を持つ読者を虜にするのは何とんでもコンゴ人が口を揃えて「無理」と断言した旅を著者がいかに成し遂げたかである。

マイ・マイとして知られるゲリラ兵が潜伏する村がいくつもあるコンゴ東部の治安に対する不安。政府や軍関係者に通行料を巻き上げられないための回避策。モブツ独裁政権のもとで長い間整備が行われず、熱帯雨林が茂るケモノ道

と化したかつての主要路。このような場所で最も頼れるオートバイとガソリンの調達。これらに対処するには並々ならぬ情報収集能力と機転に加え、運も必要である。さらに、定期船の運航が止まって久しいコンゴ川では、丸太をくり抜いて作られた手漕ぎ船に身を預け、国連のパトロール船の巡航を待つ日々が続く。現代の「探検家」を気取る著者の旅が、国連や援助機関に大きく助けられてこそ成り立つものとなっていることに違和感を持つ人もいるかもしれない。

### ●医療援助に携わる青年医師

最後は、フランスの大手医療援助組織（国境なき医師団）の一員として、アンゴラと南スーダンで働いた経験綴った若いオーストラリア人医師による『骨折した足に絆創膏…国境なき医師であること（と独身であり続ける他の方法）』（紹介文献③）である。本書のタイトルは、十分な設備がなくスタッフの数も乏しいアフリカの診療所や緊急援助の現場で医療行為を行うことの困難と創意工夫という予想可能な内容を思わせるものではあったが、それでも私はこ

の魅力的なタイトルに惹かれ、良い意味で裏切られた。

いわゆる先進国と呼ばれる国ならば、おそらくどこでも医師になる人は優秀なエリートで、その職業は名声と十分な報酬をもたらすものだろう。そういった約束されたキャリアを捨て、設備も薬剤も医師もすべて不足するアフリカで医療行為に従事する人びとは正義感が強く、使命感を持った立派な人に違いない。著者も確かにそういう人なのだが、同時に本書では先進国のリベラルな教育を受けた若い医師が文化や「常識」の異なるアフリカの医療の場で直面する苦悩や葛藤と現場で感じる援助の矛盾が率直に語られていて、だからこそ共感を呼ぶ内容となっている。セスナ機で飛び、武装勢力の襲撃に備えて暮らすのはやっぱり怖く、手遅れの状態でやってくる極度の栄養失調の子どもを救えないことに苦悩し、妻を救うための輸血を認めない夫に怒り絶望する。プライバシーがほとんどなく、安全上の理由から行動範囲も非常に限られたなかで正気を保つにはリフレッシュ休暇が不可欠である。

だが、南スーダンでの任務半ばで挫折しオーストラリアに戻った

ものの、しばらくするとまた、著者は医療援助の現場に戻ることを希望する。時に命を懸けることすらも意味する医療援助の場に医師たちを繰り返し駆り立てるものは何なのか。近年のアフリカで猛威を振るったエボラ出血熱患者を治療する過程で命を落としたたくさんの医療関係者に敬意を示しつつ、そんなことを考えずにはいられない一冊である。

（さとう ちづこ／アジア経済研究所 アフリカ研究グループ）

### 《紹介文献》

- ① Jonny Steinberg, *A Man of Good Hope*, Johannesburg and Cape Town: Jonathan Ball Publishers, 2014.
- ② Tim Butcher, *Blood River: A Journey to Africa's Broken Heart*, London: Vintage Books, 2008.
- ③ Damien Brown, *Band-Aid for a Broken Leg: Being a Doctor with no Borders (and Other Ways to Stay Single)*, London: Allen & Unwin, 2014 (Paperback edition).